

〔大和文華館の日本絵画展によせて〕

国宝 一字蓮台法華経〈普賢菩薩勸発品〉をめぐって

記録的な猛暑が続いた今夏、筆者は福島県会津美里町にある古利・龍興寺を訪れました(図1)。会津には、平安時代に制作された薬師如来像がご本尊の勝常寺、本堂に会津最古の正和三年(1314)銘を持つ厨子が安置される法用寺など、天台宗の古刹が点在しています。龍興寺は、町の中心部にほど近い旧街道沿いにひっそりと佇んでいます。境内には、徳川家康の側近として活躍した天海僧正の両親の墓があり、近くには生誕の地とされる場所もあります。ところで福島県には、国宝に指定される美術工芸品が二件あります。一件が前述の勝常寺薬師如来像及び脇侍像、もう一件が龍興寺の所蔵する「一字蓮台法華経」です。

「一字蓮台法華経」はその名の通り、経文の一文字一文字が蓮台に載っています。すなわち、一字一字を仏身に見立てており、抽象された仏のすがたの一つの極致であると言えます。同時代の装飾経典というと、平家納経や久能寺経が想起されますが、こちらは経文を書写する料紙そのものを、金銀の切箔や砂子を刷いて装飾したものであり、文字そのものに蓮台を付すという加飾がなされた経典は、龍興寺及び当館所蔵の遺例が伝わるのみです。

当館所蔵の経巻は(以下、文華館本と略称)、『法華経』二十八品の最後の部分「普賢菩薩勸発品」を書写したものです。長寛二年(1164)に奉納された平家納経よりも降る、十二世紀後半の制作と考えられています。文華館本の

大きな特色は、見返の部分に添えられた大和絵です(図2)。見返には経意を端的に表す図様、ここでは普賢菩薩の影響が描かれることが通例ですが、珍しく、法会の様子が描かれます。吹抜屋台の室内で営まれる法会には九人の僧侶が参加しています。画面中央、柱を背に座る僧侶は経を誦読していますが、経巻はさらびやかに輝いており、僧が手にしているのは文華館本そのものかも知れません。隣には、数珠を手にした貴人と市女笠を被った女性が並んで座りますが、おそらく彼がこの法会の施主でしょう。また、画面左下には仏台が置かれます。本尊画像が懸けられていたと思われますが、普賢菩薩像の可能性が極めて高く、隠喩的な表現がなされていることが分かります。

初代館長の矢代幸雄は、見返絵の人物たちの肖像性に着目し、中央の僧侶は後白河法皇であると考えました。京都・妙法院に所蔵される院の肖像画との類似を指摘しています。これを受けて、院の編纂になる『梁塵秘抄』の記述を手がかりに、見返絵を読み解く試みがなされました(白畑よし氏)。後白河院が師と仰いだ今様の名手、乙前の一周忌法要を絵画化したものであるとの説です。法要に際して院は追善のための今様を披露するのですが、当日出席しなかった女房・丹波の夢に後日、乙前が現れます。夢の中で乙前は「白き薄衣を足につつまて参りて、障子のうちにいて、差し対ひて、この御歌を聞きに」来たというのです。夢の中で丹波が聞いた今様はま

さに法要当日に披露された歌であり、一同大変驚いたという逸話です。画中では市女笠を被り、円文をあしらった衣を着、物忌みをしめす懸帯を付けた、向かって右端の女性です。隣の烏帽子を被った貴人は、琵琶の名手として知られた藤原師長、左端にいる若い僧侶は今様における院の後継者とうたわれた源資時、隣の市女笠を被った女性が遊女・延寿、顔のみをこちらに出したあどけない少女が乙前の娘に当たるとされます。すなわち、彼岸と此岸のあわいの、院のごく身近にいた今様サークルの人々が描かれているとの解釈です。

一方、同じ『法華経』でも「法師品」の見返には、その教説に基づき、経を誦する僧と聴聞する男女の俗人という、文華館本と共通する図様が見出せることが知られます。この点に着目し、当時貴顕の間で行われた「源氏供養」との関わりから、『源氏物語』の登場人物を想定する説もあります(増記隆介氏)。「源氏供養」とは、地獄に堕ちてしまった紫式部及び物語の読者を救済することを目的に行われたもので、源氏物語五十四帖を法華経二十八品に宛てた一品経にて供養したようです。法師品には「明石巻」が宛てられることから、文華館本に描かれた貴人と二人の市女笠をかぶった女性には、光源氏、明石の入道、明石の姫君が投影されているとの解釈です。平安貴族たちが競うように装飾経を制作する様子は、『栄花物語』に著名な一節があります(巻十六「もとのしづく」)。藤原道長の娘、妍子をはじめとした女房たちによる一品供養の様子が描かれ、経巻には贅の限りを尽くします。ただ一方で、その有様は「功德とは見

えて、各(おのおの)挑みわざのやうに見えて、なかなか罪作りに見え」と批判的に記されます。

文華館本同様、経文一文字一文字を仏とみなす遺例として、「一字宝塔法華経」や「一字一仏法華経」があります。経文を一文字ずつ宝塔に納めたり、経文と如来形を一行ごとに交互に配したもののようですが、何れも経巻全体を美しく装飾することはなく、控えめな料紙装飾に特色があります。龍興寺所蔵の経巻も、華美な装飾は避け、写経に伝統的な一行十七文字詰です(図3)。一方、文華館本は一字一仏の思想に基づいているにも関わらず、金銀の切箔や砂子を刷いた料紙に書写され、この点でも特殊であるといえます(図4)。また、文華館本には経文の欠落箇所と重複箇所があります。例えば、巻末に記される「皆大歡喜」は、欠落箇所を補うために敢えて二度繰り返されています。つまり、経典の正確な書写よりも、さらびやかに飾ることを優先したことがわかります。

平安時代後期には、特定の個人と結びつき、図像が選択されて再構成された仏画が制作されるようになります。藤原忠実を供養する法要のために仏画一鋪が制作されたのですが、そこには、阿弥陀如来・不空罽索観音・愛染明王という、生前忠実が信仰していた仏が描かれました(『玉葉』文治二年二月十八日条)。こうした、特定の経典に依らない個人と結びついた造像活動が行われる当時の状況に、文華館本が他の装飾経と一線を画す、他に類例のない遺例であることの手がかりがあるように思われます。すると、制作者

に後白河法皇周辺を想定することは、やはり有力なのではないのでしょうか。
(古川攝一)

図4



図3

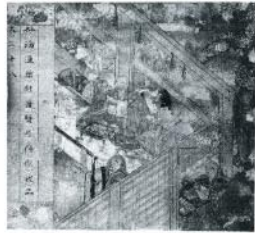


一字蓮台法華経如来神力品第二十一(龍興寺旧蔵)京都国立博物館蔵

図1



図2



季刊 美のたより No.172

平成22年10月1日

発行 大和文華館